

最優秀賞

「鳥類学者 無謀にも恐竜を語る」 川上和人(新潮社)

情報メディア学科 今井勝斗

「世の中には2種類の間がある。恐竜学者と鳥類学者だ。そして、私は鳥類学者だ。」ある意味衝撃的な文章で始まるこの本は鳥類学者である著者の視点から恐竜についてプロファイリングした一冊である。著者曰く恐竜学への身の程知らずのラブライターらしい。

本の中身はというと、恐竜の羽毛、尻尾、求愛行動、どれも化石から推測するのが難しい恐竜の生態を末裔とされている鳥類の生態から推測していくといった鳥類学者ならではの内容で、恐竜の本としても今までにはないとても斬新なものになっている。

真っ白な鳥もいるから真っ白な恐竜もいたに違いない、鳥の先輩である恐竜なのだからぜひとも木の上に巣を作っていてほしいなど、呆れてしまいそうな鳥類学者の妄想を真面目(?)に仮説を立て、ロジカルに推測していく流れはおもわず最後には「そうかもしれない」と納得してしまうような説得力を持っている。基本的に現生鳥類と恐竜を比較して話が進んでいき、わかりやすい注釈もたくさんあるので、あまり恐竜のことを知らないという読者でもストレスなく読むことができるだろう。さらに文章だけではなく、可愛いユーモラスな挿絵たちも読者の想像を掻き立て、補強してくれている。

この本は最初にあげた文章からもわかるように堅苦しい学問書などではなく、ユーモア溢れる非常に愉快的な「ラブライター」だ。軽快な語り口で綴られていく文章はとても読みやすく、所々に挟まれるジョークが難しい学問の話の中和してくれている。ページを進めれば進めるほど著者が織りなす恐竜と鳥へのラブが詰まった世界に加速度的に引き込まれていく。読了後には恐竜だけではなく、今空を飛んでいる鳥類への見方も変わっていることだろう。